

芥川の遺した言葉から生まれた物語

— 横光利一 『上海』 誕生まで —

栗崎愛子*

(e-mail: gon.travelter@gmail.com)

< 목 차 >

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| 1. はじめに | 4. 二人の〈上海〉と〈身体〉 |
| 2. 継承される〈上海〉と「5・30事件」 | 5. 新感覚派に求めた「新しいもの」 |
| 3. 紀行文か小説か | 6. 「赤」と芥川 |
| | 7. おわりに |

キーワード: 横光利一 (Yokomitsu Richi)、芥川龍之介 (Akutagawa Ryunosuke)、新感覚派 (neo-sensualism)、上海 (Shanghai)、『改造』 (the general opinion magazine "KAIZO")

1. はじめに

横光利一は、芥川の自殺から五年後の一九三二年三月、随筆「早春」¹⁾の中で「私に一番はじめに上海へ行けと教えた人は、芥川氏である。」と告白した。また、十年後には『静安寺の碑文』²⁾で「私に上海を見て来いと云った人は芥川龍之介氏である。氏は亡くなられた年、君は上海を見ておかねばいけないと云はれたのでその翌年に上海へ渡ってみた。」と記した。

一九二七年七月二四日に芥川龍之介が自殺して、五年後、十年後と、横光は上海を通した芥川の回想を公に発表している。横光利一の『上海』は改造社と書物

* 九州大学大学院比較社会文化学府 博士課程修了

1) 一九三二年三月、『東京朝日新聞』掲載。『定本横光利一全集』第一四巻、河出書房社より引用。

2) 一九三七年一〇月、雑誌『改造』における連載『考へる葦』第一回。『定本横光利一全集』第一三巻、河出書房社より引用。

展望社より二度、刊行されているが、いずれの序文にも、芥川の名を挙げることはなかった。『上海』執筆時には、新感覚派の旗手として新進気鋭の作家だった横光は、芥川の思い出を振り返る随筆を書く頃、「文学の神様」とまで呼ばれるまでになっていた。

死を間近にしていた芥川と次世代の文学を担う作家として台頭していた横光。二人の日本人作家が、大正末から昭和初期に接触し、それぞれのアプローチで中国言説を紡いでいく。

本稿では、芥川がなぜ横光に上海行きを勧めたのかについて、時代背景、文学的立場、横光の小説の方法論から検証してみる。これは横光自身も、作家という職責をもって、繰り返し問うたことであろうし、おそらく上海へ行くたびに考えざるをえない問いであっただろう。芥川と横光の二つの世代が捉える〈中国〉について、世代による変化、表現形態や修辞法の違いの中にも、受け継がれてるものもある。本稿は、その両者の特質の相違についても考察してみたい。

2. 継承される〈上海〉と「5・30事件」

横光は、生涯三度の上海体験で、〈上海〉というトポスの複雑な国家間のヒエラルキーの中の日本を目の当たりにした。中国、西欧、日本というトライアングルを、横光は「みじめな東洋」³⁾と呼んだ。国際関係が複雑に歪んで絡む〈上海〉の中に自分の身体が置かれて初めて見える日本があったのだろう。神谷忠孝⁴⁾は、横光の海外体験について、「外国に出かけたら必ず取材作を書くという姿勢は最後まで持続した」ことを指摘し、「このように西洋に行く前に中国、朝鮮を体験したことは、近代作家の中でまれである。」と指摘する。

横光が初めて上海を訪れたのは、一九二八年四月のことである。小説『上海』を書くにあたっての取材旅行であった。小説は四年越しで書かれることになるが、取材旅行の期間は、約一ヶ月ほどである。横光は上海を歩きながら、芥川がなぜ自分に上海行きを勧めたのか、そして自分に何を期待したのか、自分はどう仕事

3) 『上海』改造社、昭和七・六、「序」（初版）。

4) 神谷忠孝(2015. 3)「横光利一と外国」『横光利一研究』第一三号。

をすべきなのか、上海という「各国が集まって政府を造っている不思議な都会」⁵⁾を相手にその存在について、その意味を繰り返し考えた。

横光の『上海』執筆の契機となった芥川龍之介自身は、一九二一年三月から七月にかけて、大阪毎日新聞社の特派員として中国に渡り、約四ヶ月を過ごしている。そして、その体験をもとに翌月8月から『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』の連載として「上海游记」「江南游记」を執筆する。そのなかで、たびたび体調不良を理由として筆を止めた。

この中国体験記の続編として芥川は、一九二五年四月に執筆した「北京日記抄」を『改造』六月号に発表している。秦剛「改造社による中国言説の構築—『支那游记』から『大魯迅全集』の刊行に至るまで」⁶⁾は、芥川の「北京日記抄」が『改造』六月号に発表されたことに着目する。この時期、上海では日系紡績会社に対する中国人労働者による大規模なストライキ、五・三〇事件が勃発している。秦論は、この事件に関する日本各新聞社の連日の報道と、この頃から看取できる雑誌『改造』の大陸問題への取り組みに注目した。

秦論は、「北京日記抄」と同号に掲載された片山潜の文章「支那旅行雑感」に、芥川が目を通した可能性の高さを指摘する。片山は、ここで中国の「革命」の正当性を主張する。また芥川が、翌月の『文藝春秋』七月号で発表した「侏儒の言葉」の「支那」の一節を挙げる。そして、片山の論説を比喩的に表現した文章が存在することを指摘している。秦剛氏による「侏儒の言葉」引用箇所は次の部分だ。

蛍の幼虫は蝸牛を食う時に全然蝸牛を殺してしまわぬ。いつも新しい肉を食う為には蝸牛を麻痺させてしまうだけである。我日本帝国を始め、列強の支那に対する態度は畢竟この蝸牛に対する蛍の態度と選ぶ所はない。

ここから、芥川の「日本帝国」を含む「列強の支那に対する態度」への批判精神が見受けられるという。芥川は、蛍の幼虫と蝸牛に列強国と中国を重ね、比喩を用いて日本への危機感を表現している。

芥川の死後、横光利一の上海渡航を支援し、『上海』の編集を手がけたのは改造

5) 横光千代子宛書簡より 一九二八年四月二十四日 『定本横光利一全集』第一六巻)。

6) 秦剛(2015.3) 「改造社による中国言説の構築—『支那游记』から『第魯迅全集』の刊行に至るまで」『芥川龍之介と上海』恵泉女学園大学平和文化研究所。

社であった。そして、また上海から帰国後、横光が小説の題材として選んだが、五・三〇事件である。

松村良⁷⁾は、「横光が「ある長篇」を連載した雑誌『改造』が、一貫して中国の動向に目を向けたことは見逃せない」とし、題材となった五・三〇事件を通して横光の『上海』が、「巨視的には『改造』誌上の「流れ」の中に位置づけられている」点を指摘している。

横光の『上海』は、この五・三〇事件を題材としているが、この題材の選択・芥川・改造社・上海渡航というキーワードを結びつけていくと、その延長線上に横光利一があり、『上海』に繋がっていく。それは芥川と改造社によって横光に与えた影響という意味合いと同時に横光自身が自覚的、意図的に繋ぎ紡いでいったとも言える。

芥川の帝国主義批判が、上海における反帝国主義運動、五・三〇事件の時期と重なっており、そこからまた横光の『上海』の題材へとつながっている点は、芥川の遺した言葉のままに上海に赴き、芥川の中国に関する仕事を継ぐ思いがあった可能性がある。芥川が生きて最後に中国について述べた時期として、〈上海〉における日本を通して、日本を含む帝国主義批判を表現するのならば、五・三〇事件は象徴的な題材となる。芥川は日本の帝国主義批判を、随筆「侏儒の言葉」に見られるような独自の比喻や、旅行記「上海游記」「江南游記」の題材を用いることで暗に表現したが、横光は、長編と新感覚派的修辞法を用いてこの題材に対峙することを決意する。しかし、芥川が「上海游記」発表後から、なかなか予定通りに執筆が進まなかったように、横光も執筆が一時止まる一年が見受けられた。

芥川と横光の中国言説は共通して、帝国主義批判の立場から日本人作家が描く行為が、表現と思想の観点から、筆が重くなりやすい傾向にあったことがうかがえる。

3. 紀行文か小説か

芥川龍之介は、一九二一年三月から七月にかけて、中国旅行に赴き体調不良のなかで紀行文を書く。そして、横光に上海行きを勧める言葉を遺して世を去る。芥川逝去の翌年には、横光利一はさっそくその助言のままに上海に渡った。

7) 「雑誌『改造』と〈上海〉」（『戦間期東アジアの日本語文学』、勉誠出版、二〇一三・八）

秦剛「改造社による中国言説の構築」⁸⁾によると、芥川の『支那遊記』（一九二五年十一月、改造社）は確認できる範囲だけでも、少なくとも九ヶ月の間に一七版まで重版されていることを指摘し、「刊行後に好調な売れ行きを見せて、改造社の新刊書の中にベストセラーにもなった」という。

芥川は大阪毎日新聞社特派員として訪中しているため、「上海遊記」「江南遊記」連載の掲載が『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』であったことから社会的影響の大きさは充分であったと考える。そしてそれが単行本化され、重版されていったことから、芥川の中国言説は大衆に多いに受け入れられたことが立証できる。

この「遊記」と名のついた芥川の中国言説について、これまでの研究の多くが芥川自身の実体験として、いわゆる「紀行文」として捉えられてきた。

しかし、近年、それが果たして紀行文なのかという疑いをはさんだ研究が存在していることを王書瑋氏⁹⁾が紹介している。秦剛氏が「『支那遊記』における〈私〉」¹⁰⁾において、文芸作品としての一面を論じ、林颯君氏の「芥川龍之介「上海遊記」論 - 〈私〉の中国観の変化を追って -」¹¹⁾では「上海遊記」は「作品に描かれるエピソードは、ある構成意識のものに改変され、配列されている」と指摘していることを挙げている。

もともと芥川作品は読んでいた横光が、上海行きを勧めた芥川の「上海遊記」をよく読み込んでいた可能性は高い。ただ、これを紀行文と捉えたのかは、定かにできていない。しかし、少なくとも、芥川が上海で日本を含む列強国に批判的であったことは「上海遊記」を通して汲み取っていたことの可能性の高さは指摘できる。

また、篠崎美生子「「上海遊記」を囲む時間と空間」「上海遊記」論 - 〈私〉の中国観の変化を追って -」¹²⁾は、芥川の紀行文の掲載先である『大毎』の性格について分析している。これによれば、「支那」を恫喝しつつ、読者の「支那人」

8) 『芥川龍之介と上海』、二〇一五・三、恵泉女学園大学平和文化研究所

9) 「『上海遊記』のために」（『芥川龍之介と上海』、二〇一五・三月、恵泉女学園大学平和文化研究所）

10) 『芥川龍之介研究』（二〇〇八・八、第二号国際芥川龍之介学会）

11) 『芥川龍之介研究』第五、六合併号、二〇一二・九、国際芥川龍之介学会

12) 『芥川龍之介研究』第五、六合併号、二〇一二・九、国際芥川龍之介学会

に対する敵意を煽るとともに、日本が優先的に領有してしかるべき「支那」という立場に他国が進出していることを報じて危機感を煽ろう」とする記事を掲載し続けたメディアのひとつであると位置づけている。そこにデイリーで掲載されてゆく芥川の「上海游記」の中に、日清・日露戦後に日本で流通した「上海」のイメージ、『大毎』が打ち出す「支那」像から「はみ出す可能性が、このテキストにないわけではない」と指摘し、「『大毎』紙上にノイズをもたらしかねない言説が許容された可能性」を重視している。

芥川自身がたびたび筆を止めたのは、体調だけではなかったのではないか。中国に「ロマンチズム」を抱いてきた日本人作家・芥川が、中国を捉える困難、複雑さが芥川の心情を追い詰めていった、という可能性も考慮されはじめている、といえる。

芥川は中国言説の空間の中で、良心を捨てきれずに、フェードアウトするしかなかった。それから、芥川の死後から一年も経たずして、横光は、ただ一ヶ月の上海滞在を経て、そこから資料を集め、長編小説『上海』となる連載をはじめている。執筆期間は約四年におよんだが、やがてこの作品を通して新感覚派期の修辭法から卒業してゆく。横光文学は『上海』執筆中も、「鳥」（昭和五年二月、『改造』）、「高架線」（昭和五年二月、『中央公論』）、「機会」（昭和五年九月、『改造』）、「寢園」（昭和五年一月から一二月、『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』）といった作品を経て、意欲的に新しい文体に挑戦しながら展開していった。だが、横光はその後も、この第一回上海渡航を契機として、植民地化されてゆくアジアの老大国・中国を通し、軍事力に勢いをつけながら侵略国家と化してゆく日本や日本人について問うようになっていった¹³⁾。

横光は、その様を「自分の住むみじめな東洋」と呼んだのだ。中国と西欧列強の間で立ち振舞い方がわからないなりに、〈上海〉というトポスに食い込み、根ざす日本人たちの姿を書いた。だが、この問題は中国に身を置く日本人の誰もが自問自答せずにはいられないものであって、問題そのものに、なんら特異性は見いだせない。それは芥川も然り、横光も同様である。

むしろ、文学者が上海について思考した場合、特異性が表れ出るのは、その表

13) 横光は随筆「支那海」（一九三九・二、『改造』第二一卷第二号に発表）において「私は昭和三年に「上海」を書いて以来、共同租界は、いつも考への舞い戻る、私の問題の故郷の一つである。」と述べている。（『定本横光利一全集』第13巻、439頁）。

現技法そのものになってくるであろう。それをどのように捉えるかということはもちろんのことだが、「外国関係を中心としたこののっぴきならぬ大渦を描くということは、描くこと自体の困難の他に、発表するそのことが困難」¹⁴⁾であった時代であるからこそ、文学者の表現技法が試される。

横光と〈上海〉との関わりについても、〈上海〉に対する思考の特異性というよりも、作家としていかに『上海』を表現するのか、という特異性のほうが顕著であり、重要であるといえる。

その点については、横光自身も自覚的であった。支援先である改造社社長の山本実彦に、執筆形態に対する強いこだわりをうたっている。

上海より帰国後、すでに舞いこんでいた紀行文の依頼を断り、山本に直談判して長篇執筆への思いを訴える書簡を送った。横光文学初めての長編小説に挑戦することになる。次の引用は、山本に宛てた手紙の全文である。

冠省 先日お邪魔に上ったんですが、ご不在でお目にかかれませんでした。今日水島君が来られまして上海紀行を書けとのことでしたが、紀行に書いて了いますと材料が盛り上がって来ませんし、たいていの人がそれで失敗して了っています。それで私は上海のいろいろの面白さを上海ともどもことせぜずに、ぼっかり東洋の塵埃溜にして了って一つそう云う不思議な都会を書いてみたいのです。それには紀行でも、短編でも書いて了ったら、もう駄目ですから、じくじくかかって長篇にしたいと思っていますのですが、私の希望をお容れ下さって今度の紀行文はお赦しを願いたいと思います。書き上げて了いましたら、いづれお世話をお願いしなければならないのですが、私の無理をおききくだされば大へん幸甚に存じます、先は御願いまで。早々頓首（一九二八（昭和三）年六月一五日消印 改造社の山本実彦宛）

この書簡から、最初は横光にとって一筆で済ませる話でもなかったことがわかる。わざわざ山本本人に会いに行ったが会えなかった、ゆえに書簡を書いた。この書簡において、紀行文ではなく、長編小説にしたいという「御願い」は、希望というよりは強い意志となって表れている。さて、横光のいう「失敗して了って」る紀行文を書いた「たいていの人」のなかに芥川が含まれていたのだろうか。

14)『上海』改造社、昭和七・六、「序」（初版）より

これを考えてみると、横光利一は芥川龍之介をどのように目していたのかを探る必要がある。また、芥川の中国紀行文はどのような評価がなされたものであったのだろうか。

横光の山本宛て書簡の中で書かれた「失敗」とは、芥川の中国言説へのフェードアウトも指し示されるのだろうか。横光が選択した〈上海〉言説の手段は、紀行文ではなかった。

横光の戦略は、ただ「新感覚派」による文学作品として〈上海〉を書くということになる。良心を持ち続けようとする日本人、良心をかなぐり捨ててみせる日本人、アジア主義者と称して野望を燃やす日本人、それぞれの上海居留移民の姿をテキストに詰め込んで描いてゆく。芥川の描く一人称「私」を通した紀行文ではなく、〈上海〉をより多角的に捉えるために、客観性を追求した〈新感覚派〉スタイルの小説形態を手段とした。上海に生きるさまざまな日本人の生き方や思想を、愛や性を用いながら表現し、描きこんでゆくことは、世にでた『上海』テキストの完成度はともかく、長編小説であればこそ可能である、ということができよう。

横光は、改造社の紀行文依頼を丁重に断りながら、是が非でも小説を書かねばならない、と熱っぽく願い出ていることから、小説執筆への譲れないこだわりを感じることができる。しかも、初めての長編小説に挑もうというのだから、強い小説執筆の動機が横光の中におこっていたことがうかがえる。

山本宛ての書簡や『上海』刊行時の序文の中で、芥川の名こそ出さなかった横光であったが、芥川の残した上海行きを勧める言葉は、五年、一〇年経ったあとにも胸中に響いていたことが『静安寺の碑文』よりわかる。芥川が「君は上海を見ておかねばいけない」という言葉を残したのは、新感覚派の旗手の立場にあった作家・横光利一に対してであると解釈して違いはない。芥川は自身の紀行文執筆の経験として、寄稿文は小説よりも、作家とテキストとの距離を近くしやすいこと、またそれがゆえに行き詰まりやすかったことを知り、横光にはトポス〈上海〉を一つの文学作品として捉えて表現してみてもどうか、という思いがあったかもしれない。横光からしても、当然自分を新進気鋭の作家であると自覚していれば、当然、独自の新感覚派論を用いて、その感覚と理論に基づき、小説として上海という都市に挑むべきであると判断しただろう。それが、横光のなかで長編小説執筆の意思の固さを生みだしている。横光は、芥川の上海言説を失敗と捉えていたのは判断しかねる。しかし、すくなくとも、芥川の苦悶はシリ得たであら

うし、紀行文の中の文学性を読み取る中で、横光自身は全面的に文学作品として書いてみたいという意志が、山本への書簡からも伝わって来る。

しかし、実際に取り掛かった長編小説の執筆の過程で、これまでの新感覚派論による作風によって、長編小説を執筆してゆくことには苦心した形跡が多いに残る。これについて詳しくはまた別の機会に検証することとするが、何度も改稿を重ね、その後、自ら決定版と称した書物展望社刊行の『上海』にたどり着くまで、七年の歳月が流れている。だが、この作品について、横光自身、「不出来」¹⁵⁾と評している。それでも、横光にとっては「愛着」も持ちながら歳月をかけて挑むべき作品となった。

時を経て、「文学の神様」と言われる様になった頃の一九三六年二月、横光利一は、芥川龍之介と同様に、『東京日日』『大阪毎日』両紙の特派員として欧州旅行に赴く。そして、一九三六年五月、『文藝春秋』に「欧州紀行」という紀行文を書いた。日本郵船箱根丸で渡欧した横光は、上海を経由先として、再びその地を踏み、芥川を偲んだ。（帰路はモスクワからシベリアを経由して帰国している。）この『欧州紀行』は、日付の刻まれた、独白体の、いかにも紀行文らしい紀行文であり、新感覚派と呼ばれた時期とは『上海』を最後に決別することになる。

4. 二人の〈上海〉と〈身体〉

林颯君氏の「芥川龍之介は中国旅行をどう語ったか—「上海游記」から「江南游記」への屈折」¹⁶⁾において、芥川は「社命がなければ、中国の民衆を見たい」という言い方をする一方、中国人と自分の間には大きな隔たりがあると自覚している点を指摘する。つまり、自らの立場を「旅行者」であるという境界線から脱することはなく、「「ロマンティック」で「小説」めいた中国人の姿に潜む現実の生活の苦しさに触れることはできないという断念が「私」にはあるのではないだろうか」という。この芥川と中国人の生活の距離は、〈身体〉の距離を通して体現される。

「〈私〉は車上から、船上からあるいは驢馬の上から中国人を見て通り過ぎていく

15) 「上海再刊の序」一九三五年三月 『定本横光利一全集』第一四巻

16) 『芥川龍之介研究』（二〇〇八・八、第二号国際芥川龍之介学会）

だけの存在である。中国人と自分との間にいつも距離がある。」という。

こうした「自分は日本人であり、中国人とは一緒になれないという『上海游記』の最後に語られた自覚」とともに、「中国では、いたるところで排日が叫ばれている。自分が排斥される日本人でもあることは、更にこの距離感を感じさせてしまう」という政治的問題が絡んでゆく。芥川が想像の中で抱いてきた中国への「ロマンティック」な好奇心は、現実の中国の生活の風景の中で、厳しく断裁されていった。「『私』は単なる旅行者ではなく、中国を侵略し中国人には排斥される日本人の一人」であり、その自覚が「中国人とは一緒になれないという思いをますます強くしているのではないだろうか。」と述べている。

また、林論は「私」の病気についても触れている。「病気でないことは無論、嬉しい。しかし、『私』は、それで満足することができない。『私』は健康な、強い日本人として中国に滞在することに耐えられない。嘘でも病人でいたいのである。」と指摘するのだ。それは、上海における診察の場面による引用からである。

「何処も悪くありません。悪いと思ったのは神経ですね。」

「しかしまだ漢口から、北京へ行かなければならないのですが、——」

「その位の旅行は大丈夫です。」

私は兎に角嬉しかった。しかしその嬉しさの何処かには、折角上海へ帰つて来たのも、結局骨折損に過ぎなかったと云ふ、失望があつたのは事実である。里見先生は立派な御医者だが、憾むらくは立派なサイコロジストぢやない。もし私が先生ならば、たとひ無病息災でも、かう云ふ診断を下したであらう。

「右の肺にちとインフラマティオンがあります。すぐに御入院なさるがよろしい。」（二十九 南京（下））

芥川の〈上海〉体験において、自分の〈身体〉が、日本人としてしか存在しえないことの矛盾を感じていたこと、また、中国における日本人と中国人との関係が、侵略国家としての日本の武力を背景にして成立していること。そして、芥川自身はこうした日本人の立ち位置から徹底的に距離を置くため、旅行者かつ病人として存在することに意識的であったことが挙げられる。

また、旅行者で病人であるということは、一時的な存在かつ弱者であり、消滅可能な存在でいなければならない。時期がくれば帰国し、この空間から離れ、短い交流の一切を断ち切ることでのみ、侵略者である日本人の立場から解放される。ただ

中国旅行を通して、〈身体〉を病人という弱者においやることで、武力や国家権力のカテゴリーに反して存在しようとする。また、良心とともに、長らく抱いてきた中国へのロマンチズムというこれまでのイメージが破壊されるような中国の実生活や風景に対する幻滅も日本人の感覚として否定できない。この中国旅行の徹底した〈身体〉の消極性から、日本の対中のあり方に対する芥川の考えが認められる。

芥川の「上海遊記」「江南遊記」研究における紀行文であるかどうかという疑いをもった近年の先行研究から、紀行文を装いながら、その題材の選択や紀行文中の「私」という主体と芥川との距離を操り、日本への帝国主義批判の精神を込めたうえで、文学作品にすり替え、たくみに検閲の目をかいくぐる可能性を見出ししている。こうした先行研究から、芥川という作家の、実に鮮やかな知的戦略が蘇ってくる。それは同時に、〈上海〉をめぐる横光文学にもたらした影響について考える余地が生まれくることを意味する。

芥川は「支那遊記」の執筆過程で何度も筆を止めている。体調不良なのか、精神的な行き詰まりなのか、その両方なのか。「支那」を書き連ねることは、自分の存在をフェードアウトさせたはずの中国という空間に、再び〈身体〉を置きなおすことと同じ意味がある。「弱者」でいたいはずの自分ではあるが、多少なりとも健康な日本人にもどれば中国紀行を書かなければいけない。しかし、書く時分には、再び「強者」に押し上げられそうになり、またすぐに「弱者」に身を落とすスパイラルは苦しいものであったにちがいない。

芥川が横光にどの程度〈上海〉への持論を語ったのか。横光が書き残した上海に関する芥川の手紙は決して多くはない。芥川に上海行きの勧めを受けたことを書いているほかに、「芥川龍之介氏は支那へ行くと政治家になると云つてゐる。」¹⁷⁾や、「上海へ行くと政治のことばかりに頭が廻って困ると私にこぼしたことがある。」¹⁸⁾（「考える葦 北京と巴里（覚書）」昭和一四・二、『定本横光利一全集』第一三巻）という短い言葉だけが遺されている。しかし、世代を跨ぐ僅かな時間の中で、芥川の生前は、〈上海〉に行った経験のある作家と、まだ行かない作家との立場で〈上海〉が共有され、交わされた。

横光の『上海』も、また〈身体〉を通して描かれている。テキストには、さま

17) 「空気その他 空気」（1928・7 `『読売新聞』）、『定本横光利一全集』第一四巻、河出書房より引用

18) 「考える葦 北京と巴里（覚書）」昭和一四・二、『定本横光利一全集』第一三巻、河出書房より引用。

ざまな思想や立場の日本人を登場させるが、〈上海〉において絶対的なものはただ日本人であるという〈身体〉だけである。抗日運動、反帝国主義運動のさなかに、この日本人の〈身体〉を浮かべて、それから逃れられるものは、〈身体〉の消滅、すなわち「死」でしかないことを書く。

芥川龍之介と横光利一、二人の作家、二人の世代は、紀行文と長編小説という執筆形態を越えて、〈身体〉という私的なものが、〈上海〉においてはたちまち日本人という公の記号と化す抗えないシステムを体現している。

5. 新感覚派に求めた「新しいもの」

芥川が横光の上海行きに期待したのは、どういった点であったのだろうか。新感覚派の頃の横光は、文学は形式だ、悟性だと連呼しながら、一方で自然主義文学を批判し、『上海』執筆の際、「外界を描くことに集中した」（「序文」より、一九三五・三、書物展望社）という。芥川が横光に告げた上海行の勧めとは、すなわち「新感覚派」的な視点から〈上海〉を見てみると、どう表現されるのかという期待と等しい。やはりこの助言は、横光が新感覚派の旗手であったことから考えてみたい。

横光を含む「新感覚派」に対し、芥川は「文芸的な、あまりに文芸的な」（『改造』一九二七・六）の「三十三 新感覚派」の中で次のように述べている。

僕は今日の「新感覚派」の作家たちにも勿論興味を感じている。「新感覚派」の作家たちは、一少なくともその中の論客たちは僕の「新感覚派」に対する考へなどよりも新しい理論を発表した。が、それは不幸にも十分に僕にはわからなかった。唯「新感覚派」の作家たちの作品だけでは、（中略）僕等の作品よりも或意味では「新理智派」に近いと言はねばならぬ。では或意味とは何かといえ、彼等の所謂感覚の理智の光を帯びてゐることである。僕は室生犀星氏と一しょに確氷山上の月を見た時、突然室生氏の妙義山は一塊の根生姜にそつくりであることを発見した。この所謂感覚は理智の光を帯びてゐない。が、彼等の所謂感覚は、一たとえば横光利一氏は僕の為に藤沢恒夫氏の「馬は褐色の思想のやうに走って行った」（？）と云う言葉を引き、そこに彼等の所謂感覚

の飛躍があることを説明した。かう云う飛躍は僕には亦全然わからない訣ではない。が、この一行は明らかに理智的な連想の上に成り立ってゐる。彼等は彼等の所謂感覚の上にも理智の光を加えずには措かなかつた。(中略)けれども若し所謂感覚のそれ自身新しいことを目標とすれば、僕はやはり妙義山に一塊の根生姜を感じるのをより新しいとしなければならぬ。恐らくは江戸の昔からあつた一塊の根生姜を感じるのを。「新感覚派」は勿論起らねばならぬ。(中略)「新感覚派」の作家たちは少なくとも新しい方向へ彼等の歩みを運んでゐる。(中略)若し真に文芸的に「新しいもの」を求めるとすれば、それは或はこの所謂「新感覚派」の外にないのかも知れない。

自殺する前の月に発表されたこの芥川の「新感覚派」評には、共有はできないが、その文学的価値を評価する立場を示していることがわかる。

芥川が〈上海〉で病人という「弱者」であり続けたい、ということと、計画よりも紀行文執筆が遅れたこと、題材が『大阪毎日』とはそぐわないものを、紀行文という立場から誌面に共存させてみせたことなど、先行研究の指摘する観点を通して、「上海游记」「江南游记」を多角度に見てみると、芥川が日本人である自分の身の置き所に戸惑い、〈中国〉という表象を捉えあぐねていたことが透けて見えるのである。ちょうど、その時期をようやく潜り抜けた頃、勢いを見せてきた「新感覚派」に対し、共有はできないが、その文学的価値を評価する、といった立場の文章を書いているわけである。

横光の「新感覚派」論とは、「一言で云うと自然の外装を剥奪し、物自体に踊り込む主観の直感的触発物」とするわけで、芥川の言葉を借りれば「理智な連想」「感覚の飛躍」をして現象を捉えるのである。芥川の横光にたいする〈上海〉への期待は、「江戸の昔からあつた」感覚では到底おいつかない〈上海〉という都市の奇怪さを、「真に文芸的に「新しいもの」」をもたらし得る「新感覚派」によって捉えることにあつたのではないだろうか。

また、芥川の意図を横光もよく理解しており、山本実彦に宛てて紀行文ではなく、小説を、しかも長篇を、と嘆願したことは、横光自身の回想からわかる。

横光には、これまでの作品や言説から、谷崎や芥川のように中国文化に憧憬があつたわけでもなく、もとより中国に関心があつた形跡がない。また、大正から昭和へ移り変わるなかで作家の教養にも変化がある。一九〇〇年以降の生まれに

なると、小学校教育のなかで漢文を読まなくなるため、大正文学は漢文の読めない世代が多くなってゆく。芥川は個人的教養が高いため、中国の詩文を読めないわけではないが、この世代から漢文的素養の低下が指摘できる。まして、新感覚派の世代は第一次世界大戦後の文明開化によって、ヨーロッパのアバンギャルドが日本に入ってきており、堀口大学の翻訳によってダダイズム、シュールレアリズムの影響をうけていた。横光が中国をみる目は芥川世代とは素養が異なっていることが指摘できる。これこそ、芥川が横光に上海行きを勧めた理由に他ならない。西欧芸術の影響を受け、中国へのイメージが凝り固まらない横光にこそ、西欧列強に侵食される東洋の都、「下りつめた都」¹⁹⁾上海を新しい世代の眼で見てほしかったのではないだろうか。

堀口大学の翻訳によってアバンギャルドの影響をうけた新感覚派について、加藤周一が井上ひさし・小森陽一編『座談会昭和文学史1』（二〇〇三・九・一〇／集英社）の中で「堀口さんはよく訳したけれども、しかし、あまりよくわからない。ことに詩は「大体わからないのが最新なんだ」というふうに思ったんじゃないですかね」という。新感覚派の時期の横光は独特の比喻やテンポが目立つ。『上海』においても、その比喻を解説するのに、読者の想像力が要求される。続けて加藤は（その影響をうけた新感覚派は）「よくわからないような、少し変な表現が新しいと思ったのでしょうか。川端さんもおく初期の『浅草紅団』や掌編小説の初期はひどかった。それは横光さんにも言える。最初は、悪い翻訳の影響があったんじゃないかな。年をとってからはだんだんわかるようになってきた。」と述べている。

横光は一九三五年、『上海』序文において、

私はそのころ、今とは違って、先ず外界を視ることに精神を集中しなければならぬとおもっていたので、この作品も、その企画の最終に現れたものであるから、人物よりもむしろ、自然を含む外界の運動体としての海港となって、上海が現れてしまった。

と記しているが、横光自身、上海を長編小説として描くとき、この新感覚派期の

19) 『ホームライフ』 1939・10、(『定本横光利一全集』第一四巻より引用)。「静安寺の碑文」において横光は「パリは登りつめた都であるが上海は下りつめた都である。」と表した。

表現がふさわしくなかったと反省しているかのように綴っている。しかし、新感覚派の旗手としての立場に位置していた横光は、新感覚派の表現を駆使して上海を描く任務を感じていたのだろう。一九三七年、横光は「上海の事」²⁰⁾で「上海について正確な判断を下すことは、恐らく何人も不可能なことだと思ふ。私は上海という作を四年がかりで書いたことがある。その間、私はかの地で買って来た上海に関する書物や雑誌と日本で発行されたものと、四、五百冊ほど手に入れた。それも著者の立場を同じくするものを選ばず、異なったもののみ選んでみたので、立場にしたがってかくも見方が相違するものかという感想と同時に、上海という所は、人々の見方をこんなに複雑にする特殊な場所だという結論を得た」という。上海の空間に膨らんだ、東洋と西欧の文化と国力がせめぎ合う複雑な空気を、横光はただ一ヶ月の滞在で集めた情報の中で再解読していった。

この最初の上海渡航の際の感想を「静安寺の碑文」のなかで記している。「ここは世界で一番新しい形態の街なるのみならず、各民族のどのような認識も伝統も役には立たぬ所だと思ひ、各国がここから本国に持ち帰るものは誤謬を運んでゆくばかりだと気がついた。また同様に支那人自身もこの街に関しては誤りを冒しているに相違ないと思つた。しかも、この理解困難な場所に注意することなくしては、東洋の政治は行い難く、世界の政治も商業も運用不可能な状態になる時が近い将来に必ずあるだろうと考えた。」とその価値基準を定めることの困難を挙げた。こうした上海の様子を、『上海』の中でも「総て逆様に映」と描く

(書物展望社版・三四章)。ダダイズムの影響を受けた新感覚派の表現は実に上海を描写するのに適していると芥川は直感したのだろう。そして、改造社の依頼は紀行文であったが、「複雑」で「特殊」な上海を、新感覚派の独特な比喩や奇怪な文章で表現することは小説でしか書けない事であると横光は判断した。それと同時に政治的描写や暴力的、性的描写について、その独特の比喩は検閲の目からいかくぐる術にもなった可能性はある。

横光は、『上海』出版について「外国関係を中心としたこののっぴきならぬ大禍を深く描くということは、描くこと自体の困難の他に、発表するそのことが困難である」と述べ、「私は出来る限り歴史的事実に忠実に近づいたつもりではあるが、近づけば近づくほど反対に、筆は外観を書く以外に許されない不便を感じ

20) 19)に同じ。

ないわけにはいかなかった」という。執筆前の山本に宛てた手紙の中で「上海と
もどこともせず、ぽつかり東洋の塵埃溜にして了つて」書きかたったものの、
改造社に「上海」とタイトルを決められてしまった。だが、「固有名詞は私個人
で変更し」、この理解不可能な街を表現上の観点から、また検閲対策から「読者
の想像力に任す不愉快な方法さえ随所でとりながら、横光利一の『上海』は完
成し、近代文学の中国を題材とする代表作の一つとなった。『上海』は、雑誌
『改造』の「現代支那号」の企画の延長線上に存在すると同時に、新感覚派期の
横光の集大成になったのである。

6. 「赤」と芥川

芥川の自殺後、丸一年も経たないうちに上海へと旅立っていった横光利一に
とって、芥川龍之介という作家はどういう存在であったのだろうか。横光は、随
筆のなかで、たびたび芥川について振り返っている。

ちょうど芥川自殺の頃、横光は「作家と家について」²¹⁾を書いている。この随
筆の中で、横光は、佐藤春夫や志賀直哉、谷崎潤一郎、室生犀星といった作家た
ちの文章について、独自の分析をし、批評している。そして、その文章に一区切
りがついたのか、あるいは途中段階であったのか、その随筆の最後は、つぎのよ
うな文章で締めくくられている。

ここまで書いたとき、芥川氏が自殺した。原色が一つ無くなった感じがする。
然も赤だ。佐藤春夫氏が青なら里見氏は黄色である。赤、青、黄、此の三原色
が鼎立して既成文壇を様式的に安定せしめていた感があったが、今は芥川氏に
代わるべき赤がない。然もそれは殆ど絶対的でないといつてもよいであろう。
赤のない構成は活動力の衰えることが必然だ。此の見方からしても、芥川氏の
死は重大な影響を与えるに相違ない。

この文章からも、横光が芥川という作家をいかにまなざしていたのかがわかる。
既成文壇の「活動力」の象徴として赤という鮮やかな色彩で芥川の才能を形容し

21) 『三田文学』一九二七・九、『定本横光利一全集』一三巻より引用。

た。そして、もうこの才能は「代わる」ことが「殆ど絶対的にない」というのだ。横光が、原色に例えて、その才能を称した佐藤春夫や里見弴といった他のどの作家に対してよりも、芥川への圧倒的に深い敬意が汲み取れる。また、それゆえにその後の日本既成文壇への「重大な影響」を危惧している。

「作家と家について」は、随筆全体にこうした「色彩」を用いたメタファーが見られたわけではなく、芥川の自殺の知らせを受けて、唐突に「色彩」によるメタファーを用いて、この「作家と家」という作家論を締めくくっている。この随筆の結び方もまた、唐突に加筆された印象を受ける。芥川の死は、横光にとっても大きな衝撃が走ったことがうかがえるものだ。

この「色彩」による芥川追悼は、とくに新感覚派らしい特徴を有したメタファーというわけでもない。横光が「色彩」を用いたのはむしろ、芥川の一九二〇年代中頃から後半にかけて、芥川テキストに見られる表現の方法としての「色彩」のイメージに則っていると捉えることができる。

この晩年の芥川の「色彩」を用いる傾向について、副田賢二「現象としての「芥川龍之介」と横光利一——一九二〇年代の文学的ダイナミズムの一環として——」²²⁾の中で、「メタファーの枠組みを超えて〈意味〉の断片化を誘引するこの「色彩」の傾向は、芥川晩年の表現を駆動する主題領域であった」と述べている。横光が、芥川を「赤」と形容したことは、その芥川文学における「主題領域」を狙ったものであり、偶然のメタファーではなかった可能性があるのではないか。

福田氏の分析によると、芥川の「文芸的な、余りに文芸的な」二十六（詩形『改造』一九二七・五）にみられる「色彩」のメタファーを挙げている。「日本の過去の詩の中には緑いろのものが何か動いてゐる。何か互いに響き合うものが——」という箇所を引用しつつ、「晩年の芥川は、このような「色彩」の領域に超論理的に身を委ねることで、表現者としての自己のコンテクストを綴り変えようとしていた」という。こうした傾向の作品に、同作の三〇「野生の叫び声」（『改造』一九二七・六）のゴーギャン論で「橙色の女は視覚的に野蛮人の皮膚の匂を放つてみた。」「橙色の人間獣の牝は何か僕を引き寄せようとしてゐる。」といった視覚と聴覚を使った文章、ほかに「或阿呆の一生 三十四 色彩」（『改造』一九二七・十）の「同時に又彼の七八年前には色彩を知らなかったのを発見した。」というような文章等がそれに

22) 『横光利一研究』第九号、二〇一一・三

あたるといふ。「そこには、書き手が鋭敏な反応体と化し、最小限の言葉で外部と交錯しようとする欲望以外には何も無いのかもしれない」と前置きつつ、芥川がこの時期、表現者として変化しようとしていたことを指摘している。

しかし、こうした芥川の反応は、文壇に歓迎されなかったことにもこの副田論は触れている。「そのような表現は、実験的な新趣向として当時の文壇に歓迎された訳ではない。逆にそれは、それまで構築されてきた作家芥川龍之介を攪乱する結果のみをもたらしたと言うべきだろう。一九二〇年代中頃からそのような志向を顕在化させた芥川は、そこで時に賞翫され、時には無惨に否定されるという不確定な評価の場に、次第に引きずり出されてゆく。」という芥川が文壇から受けた厳しい評価の存在に着目している。

この芥川の新傾向について、横光がどうとらえていたのか、その見解はまだ見当たらない。だが、芥川の生前、死後を通して、芥川文学ないし人物への印象に対し、好意的に描かれていることは確かだ。

一九二九年七月、「控え目な感想（一）」²³⁾のなかで、また芥川について記述している。「芥川龍之介はわれわれの意識の上に穴を開けた。われわれは此の穴の周囲を廻りながら、彼の穴の深さを覗き込んだ。しかし、われわれは何を見たか。私は自分の口の開いているのに気付いただけだ。穴の傍で一次に私は笑い出した。何故にわれわれは笑わねばならなかったか。われわれは敗けたからだ。」死からちょうど二年が過ぎた時だ。三回忌にあたるこの月に発表されたこの文章は、芥川への追悼の意が込められていたかと思われる。田山花袋、正宗白鳥らを名指し、自然主義文学に対しては「願わくば、われわれをして卿らの昨日の糞を食らはしめるな。絶望を與へたるものは卿らである。われわれは絶望を嫌う。」²⁴⁾などと激しく噛みつく一面を見せた横光も、芥川については比類なき才能としてみなしていたことがこの文面からわかる。これには、田山花袋から横光文学に対する酷評を受けたが、芥川から受けた態度、進言からは横光文学への酷評や攻撃的批評がなかったことも関係している可能性もあるだろう。だが、それを差し引いても、やはり芥川への敬意というものの強さは確証できる文章が続いている。

また、「控え目な感想（三）」²⁵⁾では「芥川龍之介」と題した短い随筆を書いた。

23) 『創作時代』、一九二八・二、第二年第二号に発表。『定本横光利一全集』第13巻より引用

24) 「絶望を與へたる者」一九二四・7、『新潮』に発表。『定本横光利一』第一六巻より引用。

逢うと必ず志賀直哉を誉めていた人。私は芥川氏の親切な心だけにより逢はなかった。皮肉には一度も逢はない。最初に見たときはまだ殺人したことのない刀を思った。二度目には街を歩かぬ学者。三度目には竈の前に座った陶器師。四度目には疲れた兄貴。五度目には謙遜な好紳士。六度目には憂鬱な詩人。七度目には、羽根の生えた老人。八度目には睡眠薬の砕けた白い粉が、梯子の上に散っていた。

会うごとに衰弱してゆき、死に至るまでの過程が描写された短い文章である。芥川は、常に親切であり続けたという。人柄に対する横光が「疲れた兄貴」と呼んだように、自分より世代も教養も文学的地位においても先をゆく、一目置いた存在に映り続けたようだ。

この芥川の晩年の「色彩」のメタファーから、横光の「作家と家について」における結びの箇所に見える「色彩」のメタファーが、芥川への追悼であったという可能性は指摘できる。つまり、「作家と家について」と題されたこの随筆のタイトルそのものも作家と家という関係を、メタファーを用いているのだが、その執筆途中で飛び込んできた芥川自殺の知らせに、横光は芥川文学に対する敬意を込めて、また常日頃、愛読していた証として、芥川を「赤」と称した、作家らしい追悼の意の込め方、という可能性が挙げられるのではないだろうか。厳しい文壇の評価を受けた「色彩」によるメタファーで、横光利一は、芥川の才能を評し、追悼したことになる。

また、なぜ芥川が「赤」という色彩だったのかについても考えねばならないところだ。上海にいけば政治的思想を巡らせたという芥川を、横光が「赤」と表現したことに、政治色を絡めたくもなる。実際、芥川は、一九二四年頃には社会主義文献を集中的に読んでいた。プロレタリア文学や新感覚派といった新たな世代の到来を感じるものの、その中に自分の身の置き所を見いだせなかった。あくまでも、自身の立ち位置は大正教養主義の中にあり、その上で新たな世代の存在を肯定したことは、前節で挙げた「文芸的な、あまりに文芸的な」（『改造』一九二七・六）の「三十三 新感覚派」の中で確認できる。芥川が第四階級を含む新たな文学の世代を認めることが、芥川自身の存在の否定や不安につながったことの可能性が、横光に芥川を「赤」と形容させたのかもしれない。

25) 初出未詳、『定本横光利一全集』第一三巻より引用。

横光は、上海行きを勧めたとは芥川であったことをたびたび随筆のなかで明かしている。しかし、そのいずれも言葉が短く、ただ「上海へ行け」という内容と、上海へいけば、政治のことと結びつくといった内容で統一されている。それ以上の情報はない。この二人の作家には、何度か顔を合わせる機会があったことは、横光の記述から確認できるが、副田論も「両者の直接の交流はさほど濃密ではなかっただろう」と指摘しており、まして中国を共有する接点はただ上海行きの勧めた時だけだった可能性もある。

横光にとって、芥川は「私の先輩」であり、「兄貴」（「控え目な感想（三）芥川龍之介」²⁶⁾という存在であった。また、芥川と最後に顔を合わせたのが横光利一の結婚式であったと記されているので、少なからず良好な関係であったということは確認できる。また、芥川を評した随筆にも、芥川の才能を讃える文章こそあれども、芥川を否定する要素は極めて少ない。

横光の芥川に対する意識は、早くから見られたことは、すでに先行研究のなかでも指摘されていることである。井上謙は、横光が芥川を「早くから意識していた」ことを指摘する。梶木剛は、「或阿呆の一生」の「人生は一行のボオドレエルにも若かない」という視座と「蠅」の「眼の大きな蠅」の位相が同質だと指摘した。副田氏はこのような研究について「位相の違うテキストを強引に象徴化してそこにアナロジーを見出すような姿勢はもはや相対化されねばならない。」と批判する。

しかし、横光が作家であるという現実にシンプルに立ち返り、そのテキストに芥川文学の受容が見受けられ、とくに新感覚派期の「分りにくさ」ゆえ、解読の手がかりとなるのであれば、こうした研究にも意義がある。少なくとも、『上海』は長編かつ歴史思想小説としての色合いが濃く、一方で、性や愛の描写も多く、通俗小説のような側面も持つ。五・三〇事件という史実をモチーフとしているため、先行研究では思想や事件の性質における検証が重視されてきた。しかし、新感覚派期の、読みづらさを伴う文章をより文章レベルで検証されるべきであるように思う。改稿を重ねながら、作り上げられてきた『上海』テキストには、一文一文に微細な技巧が凝らされている。また、少なからず『上海』と芥川龍之介の関係は看過できない関係といえる。そこには、今後の研究課題として芥川文学の受容の可能性も疑ってかかる必要があるだろう。

26) 初出未詳、『定本横光利一全集』第一三巻より引用。

7. 終わりに

芥川龍之介は、中国言説への行き詰まりを経験したあと、横光利一に上海行きを勧めた。だが、その意図についての記述は、芥川からも横光からも残されていない。

本稿では、テキスト論における芥川文学の受容以前の、両者の文学的、世代的立ち位置の相違点を検証した。一見、両者は、紀行文と長編小説という違う分野から〈上海〉言説を表したが、横光は、芥川も関心を示した五・三〇事件を題材としたり、また両者ともに〈上海〉というトポスにおける日本人の身体を通して、日中関係への戸惑いを描いているという共通項が挙げられる。帝国主義的要素を深める日本と、侵略されていく中国との関係のなかで、文化人として中国をどうとらえるべきなのか。中国古典の教養があった芥川と、西欧文化の影響から興った「新感覚派」の旗手・横光という二人の作家が、文学の形態やアプローチの方法こそ違うものの、そこには同じ日本人という身体を通して得た中国体験の言説化への挑戦と苦渋があった。

芥川の死後、横光は上海を訪れるたびに芥川の助言を思い起こしていると随筆に記した。『上海』は、テキストレベルにおいて、横光の芥川文学への需要の考察をする必要がある。

【参考文献】

- 『定本横光利一全集』
『横光利一研究』第九号、二〇一一・三
『三田文学』一九二七・九、『定本横光利一全集』一三卷
『芥川龍之介研究』（二〇〇八・八、第二号国際芥川龍之介学会）
神谷忠孝(2015.3)「横光利一と外国」『横光利一研究』第一三号。

논문 투고 일자 : 2017. 09. 01.

논문 심사 일자 : 2017. 10. 26.

게재 확정 일자 : 2017. 10. 27.

<要旨>

芥川が遺した言葉から生まれた物語
—横光利一『上海』誕生まで—

栗崎愛子

本論では、横光利一の『上海』が芥川竜之介の助言によって誕生したことに着目する。芥川の中国言説の背景から、横光との共通点や横光による芥川文学の受容を検証していく。両者の中国言説について、二人が作家であるという点から、政治的見解よりも修辞法の選択に着目して考察し、そうすることで、芥川と横光の新たな関係性を明らかにしていく。ここでは、『上海』誕生までの両者の関係性までにとどまるが、それは『上海』というテキストの中においても、芥川文学の受容を探る可能性に繋がるものであると言えるだろう。

A story from what Akutagawa Ryunosuke Once Said
—“Shanghai” by Yokomitsu Riichi—

Kurisaki Aiko

In this paper, I focus on the fact that Yokomitsu Riichi wrote “Shanghai” following advice from Akutagawa Ryunosuke. I will examine similarities between Akutagawa and Yokomitsu and Akutagawa’s influence on Yokomitsu through considering Akutagawa’s discourse on China. This article focuses on these writers’ rhetoric, rather than their political opinions on China. By doing so, I will reveal a new relationship between Akutagawa and Yokomitsu. This study only mentions Yokomitsu’s motive in writing Shanghai, but this will be an important clue to unravel the possibility of Akutagawa’s influence on Yokomitsu.